「予防塾」に行ってみました！

編集局

今評判の、予防塾に行ってみました。予防塾というのは、東京理科大学の小林恭一教授が、予防行政に熱意を持って取り組んでいる消防職員を対象に、４年前から始めた無料の私塾です。原則として毎月第３月曜日の夕方６時30分から９時頃まで、東京理科大学飯田橋キャンパスの教室を使って講義形式で行われています。

小林先生は、総務省消防庁の国民保護・防災部長を10年前に退官され、その後博士号を取得されて、現在、東京理科大学で消防・防災の研究や教育に携わっておられます。本誌には、先生が30代の頃から「火災統計おもしろ講座」、「消防法令用語の基礎知識」などの連載を初め、多数のご寄稿を頂き、現在は本誌編集委員もお願いしていますので、取材を兼ねて受講してみました。以下に予防塾の全容をルポ形式でお伝えします。

熱心にメモをとる受講生たち

昨年の10月17日18時過ぎ、夕闇迫る神楽坂へ。人気の繁華街から路地に入ると、理科大校舎が連続しています。キャンパスがないため、公道から直接校舎の中へ。今日の教室は170人収容の階段教室。中に入ると、準備中の小林先生が小さく見えます。もう、受講生がチラホラ。聞いてみると、福島や山梨から半休を取って来た消防職員の他に、○○防災や○○法規の編集者の姿もあり、同業他社の出現に何となく対抗心が。その後、仕事が終わって駆けつけて来る人が徐々に増え、大教室もかなり埋まって来ました。消防庁の方の中には、授業が終わったらまた仕事に戻る方もいるとのこと。大変ですね。

18時半になると授業が始まり、最初に、「今日初めての方は自己紹介を」と言われてあせる。この日の授業は日本の消防法令の特徴や法令の読み方など。建築基準法令との関係、アジアとの比較など、次々に教えられる日本の消防法令の意外な事実に、いつの間にか熱中。周りを見ると、皆、夢中でメモを取っています。

個人的に一番感激したのは法律の読み方。ネットから条文をワードにダウンロードし、主語、修飾語、目的語、述語などごとに行を変え、同じ種類の言葉を色分けし、かっこ書きを削除したりすると、ただの文字の塊が、あっという間に読めばわかるきれいな日本語に。「これで、「及び・並びに・又は・若しくは」のルールさえ覚えれば、どんな難解な条文も、95％は読めるようになります。」との小林先生のお話に、全員納得。帰って早速やってみます。

講義が終わると、お待ちかねの放課後の懇親会。何となく出来上がった10人前後のグループで居酒屋に。江澤さんもどうぞ、と先生に誘われて、喜んで同行。所属の消防本部の悩みや最近の動きなどを情報交換。小林先生の人柄か、所属、肩書き、年齢などにとらわれないやりとりを聞き、これも極めて有意義な機会と納得しました。

小林　恭一 教授

関澤　愛 教授

取材２回目の１月16日は、福祉施設の防火対策がテーマの予定でしたが、糸魚川大火と市街地延焼火災防止対策に急遽変更になりました。糸井川大火の最大のポイントは、大火を防ぐために設けられた準防火地域が大火になってしまったことで、戦後の超貧しい時代に考えられた「準防火地域＋防火木造＋８分消防」という方法論では、大地震・津波・強風などで消防力がひとたび劣勢になれば、今でも市街地大火が発生してしまうことが立証されました。こんな国は日本ぐらいで、バングラデシュの方がまだましである、というデータに基づく理路整然としたお話には、目から鱗が落ちる思いでした。続いて、関澤愛教授が登壇。関澤先生は消防研究所から東大教授を経て、現在東京理科大学大学院教授をされており、年３回、予防塾で講義してくれています。今日は、関西出張から駆けつけてくれました。飛び火を加味した糸井川大火のシミュレーションが、実火災の状況とよく一致していることに一同感心。会場からは、警防経験の長いベテラン消防職員の発言や、今回の大火でテレビで大活躍のお二人の楽しそうなかけ合いに、会場からも発言が相次ぎ、大いに盛り上がりました。

というわけで、予防塾が評判になる理由がよくわかり、とうとう私自身が塾生になってしまいました。次の予防塾が楽しみです。最近では、予防塾の評判を聞きつけ、地方での出前予防塾の依頼も増えているそうです。旅費を出してくれればあとは相談次第、ということのようです。「是非うちでも出前予防塾を」という方や、個人的に入塾したい方は、小林先生にメールされたらいかがでしょうか？メールアドレスがわからなければ、近代消防社にご連絡頂ければ、塾生の江澤がお取り次ぎします。

E-mail　kinshou@ff-inc.co.jp（編集部・江澤）